

コラム・GO! GO! エレクトリシャン No.22

※(旧 DENKOU-SAN いらっしゃい!)

日本初の火力発電所が支えた「鹿鳴館の時代」 日本初の水力発電所が支えた初めての電気鉄道

前回触れたように、日本の大地を初めて電気鉄道が走ったのは1895(明治28)年。京都電気鉄道(下京区東洞院通東塩小路踏切～伏見町字油掛間の6.4km)が記念すべき栄誉を担った。

そしてこの日本初の電車、京都電気鉄道を運営するのに必要な電力は、琵琶湖疎水を活用し発電するシステムを構築した京都水利発電所からの供給を仰いだとも書いた。この発電所が実は、日本初の水力発電所だったのだ。

では、日本初の火力発電所は、いつどこにできたのだろうか? それは1887(明治20)年。場所は茅場町で、東京電燈が建設した。

左ページの下の写真は、その茅場町の火力発電所跡。現在はビジネスホテルが建っている。

さらに写真上は現代の銀座2丁目交差点付近(銀座通り)を撮影したものだが、この写真の主演は、外国人女性が颯爽と歩いている横に立つひょろりと高い街路灯である。

この街路灯は大成建設が1986(昭和61)年に「復元」したアーク灯。1882(明治15)年に銀座のこの場所に立てられたアーク灯を再現したものだが、明治15年の時点では、このアーク灯はまさに一般大衆が初めて目にする日本初の電灯だった。

明治維新から15年目、西郷隆盛が最後を遂げた西南戦争(明治10年)からはわずか5年目にして、銀座に電灯が灯ったわけだ。

さらに前述のように、銀座に初めて電灯がともってからわずか5年後の1887(明治20)年には、日本

初の火力発電所が茅場町にでき、それから8年後の1895(明治28)年には京都に日本初の水力発電所ができたことになる。

世の中にはまだチョンマゲ時代が忘れられない人が大勢いただろう明治20年代に、日本の近代はこうした「電化」の波とともに進化していった。

それらの事業を行なった企業や、牽引者(創業者)などの名前は伝わっているが、実際に施工したエレクトリシャン(電気技術者)たちの名前はほとんど伝わっていない。

ところで日本初の水力発電所となった京都水利発電所の生み出す電力は京都電気鉄道の存在とともに語り伝えられているが、日本初の火力発電所(茅場町)はといえば、あの鹿鳴館とともに語り伝えられている。

ご承知のように鹿鳴館では毎夜のごとく、欧米の外交官を招いての夜会が開催されていた。天井からは豪華なシャンデリアがいくつもぶら下がり、真昼のような世界を現出させていたとされる。

「ローソク4000本分の明るさ」と表現され、庶民を大いに驚かせた銀座のアーク灯誕生から、わずか5年後のことである。

鹿鳴館を毎夜《電力=文明》で輝かせた東京電燈はその後、浅草発電所をはじめ火力発電所を都内に次々築いていくが、東京電燈は浅草発電所以後、ドイツの交流50Hz発電機を採用するようになる。

関西で採用していた交流60Hz発電機とのこの違いが、現在にまで続く商用電源周波数の東西の違いの始まりでもあった。(この項続く)